

Title	シェイクスピアの『リチャード二世』再考：王の没落と「詩人的性格」について
Author(s)	青木, 啓治
Citation	英文学評論 (1980), 43: 1-23
Issue Date	1980-08
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_43_1
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

シェイクスピアの『リチャード二世』再考

——王の没落と「詩人的性格」について——

青 木 啓 治

リチャード二世の性格に断層があるとよくいわれる^①。最初の二幕において専制的で活動的な王が、アイルランドの遠征から帰る二幕三場をさかいに、一転して、憂うつな内省的な性格となるからである。口数がふえ、言葉が詩的となって、空想的な性格に変わるからである。S. C. Sen Gupta は、「最初の二幕の不遜な浪費者の背後に、このような詩人肌の夢想家が隠れていることは、アクションの過程において示されていない」として、そこにリチャードの性格に関する唯一の「謎」があり、この劇の「最大の欠陥」があるといっている^②。だが性格の矛盾については、それを「謎」といふまに、劇の主題との関連において追究しみる必要があるであろう。問題は、劇の後半における「詩人的」といわれる王の性格が、有能で現実的なボリングブルクとの対照から、彼の性格の弱さや政治的な無能力をあらわし、王国を失った大きな原因とみられていることである。悲しみに耽って行動しないリチャードの愚かさに対する軽蔑から、彼の悲劇を否定しようとする根づよい批評の傾向がみられることである。だが果してリチャードは、ある批評家がいうように、「王国よりも言葉を愛した」^③ために没落したのであろうか。これは王のおかれた立場が、シェイクスピアによって、絶望的なものとして意図されているかどうか

よって決まるだろう。私には、リチャードが劇の後半において多弁となり、言葉が詩的になるのは、彼の立場が絶望的になった結果であって、それが彼の没落する原因ではないように思われる。しかしこれは、劇の核心にふれる最も重要な問題であるので、綿密な検討を必要とするのである。

劇の構成からみてまず言えることは、この劇が *Woodstock*^⑥ のように、単なる道德劇の形式をもった劇ではないということである。『リチャード二世』の粉本の一つであるその劇では、佞臣達にあやつられる未熟なりチャードの種々の愚行が、実際に舞台で演ぜられている。だがシェイクスピアのりチャードは、S. T. Coleridge のいわゆる「儀礼に対する注意と王の威厳についての崇高な感情」をもって登場し、佞臣達にあやつられるというよりも、彼等を支配する専制的な君主なのである。しかも大切なことは、彼の愚行は、最初の二幕に含まれた二、三の場面ですべて *narrative* で片付けられ、佞臣達も三幕一場で処刑されてしまうのである。

この劇の特性として次に注目すべきことは、それが、初期の史劇にみられるような力と力の対立を扱ったものでないということである。リチャードがアイルランドに遠征している間に、大軍を率いて英国に侵入してきたボリングブルクは、強大な英国の貴族達と合流し、権力は不在のりチャードから雪崩の勢いで失われてゆく。そしてリチャードが唯一の頼みとしていたウェールズ人が敵方に移ってゆき（二幕四場）、国民すべてが離叛（三幕二場一〇六一—二〇）したことは、戦いが行われなことを観客に暗示する。三幕二場は、我々がすでに知っている王にとって悪い報せの一つ一つを、彼が如何に受けとめるかに興味があるのであり、劇の後半の大部分は、神聖な王から人間に没落してゆくりチャードの苦悩を描いたものである。このような劇の構成からみて、シェイクスピアの意図がどこにあったかあきらかであろう。作者は、二幕までに王の没落の理由を *narrative* で示し、彼から権力を完全に奪うことによって、暴君と篡奪者との対決ではなく、王位を奪われてゆくりチャードの心の動

きを描くのが目的であった。三幕二場をさかいに、急にリチャードの口数が増え、言葉が詩的になるのは、二幕までに王の没落の条件を示したシェイクスピアが、今やリチャードの心の中を表現すべき段階に到着したことを意味するのである。

ボリングブルクの英国侵入をきいてウェールズに上陸したりチャードはいう。

Not all the water in the rough rude sea

Can wash the balm off from an anointed king;

The breath of worldly men cannot depose

The deputy elected by the Lord:

For every man that Bolingbroke hath press'd

To lift shrewd steel against our golden crown,

God for his Richard hath in heavenly pay

A glorious angel: then, if angels fight,

Weak men must fall, for heaven still guards the right.

(III. ii. 54-62)

ボリングブルクの大軍が進撃しているとき、このような楽天的なりチャードの言葉をきくとアイロニーが感ぜられるかも知れないが、Irving Ribnerが考えるように^⑧、シェイクスピアは、ここで神権説を愚弄しようとしているのではない。ウィリアム一世以来続いた王室の最後の王であり、中世的な秩序になれたリチャードが、権威を奪

われよろこぶるとき、神権説に訴えるのは自然なことである。だがそこへ Salisbury がやってきて、絶望的な報せを伝へる。

One day too late, I fear me, noble lord,

Hath clouded all thy happy days on earth :

O, call back yesterday, bid time return,

And thou shalt have twelve thousand fighting men !

To-day, to-day, unhappy day too late,

O'erthrows thy joys, friends, fortune and thy state :

For all the Welshmen, hearing thou wert dead,

Are gone to Bolingbroke, dispersed and fled.

(III. ii. 67-74)

リチャードの運命を決したのは、二幕四場で彼が頼りにしていたウェールズ人達が解散し、ボリングブルクの側に移ったときである。そのウェールズ人達が解散してゆくのをみて、ソールズベリーは、*‘I see thy [Richard’s] glory like a shooting star/Fall to the base earth from the firmament’* といったが、その時と同じように、今こころも、彼はコーラスの役を演じているのである。リチャードの到着が僅か一日おくれたために、彼の王国が崩壊する。その差を一日にしたのは、シェイクスピアである。そこには中世的な *‘De Casibus’* の主題がみられ、作者自身、偉大なるものの運命の不思議なかなさに、審美的なよろこびを見出しているように思われる。リチャード

にまだ希望を残している積りなら、詩人はソールズベリーに、'O, call back yesterday, bid time return' といひかせないであらう。

王を元気づけようとするナーマールの 'Comfort, my liege, remember who you are' という言葉をきいてリチャードはうろたへた。

I had forgot myself : am I not king ?

Awake, thou coward majesty ! thou sleepest.

Is not the king's name twenty thousand names ?

Arm, arm, my name !

(III. ii. 83-86)

リチャードは、恐怖のために自分が王であることを忘れていたのである。王位の尊厳を信ずる彼は、「我が名よ、武器をとれ」という。だが実権を奪われたリチャードには、事実、王という名だけが残っているのであって、彼に回復の希望がなくなることば、そこにやってくる Scroop の言葉からもあきらかである。

Like an unseasonable stormy day,

Which makes the silver rivers drown their shores,

As if the world were all dissolved to tears,

So high above his limits swells the rage

Of Bolingbroke, covering your fearful land

With hard bright steel and hearts harder than steel.

White-beards have arm'd their thin and hairless scalps

Against thy majesty ; boys, with women's voices,

Strive to speak big and clap their female joints

In stiff unwieldy arms against thy crown :

Thy very beardsmen learn to bend their bows

Of double-fatal yew against thy state ;

Yea, distaff-women manage rusty bills

Against thy seat : both young and old rebel,

And all goes worse than I have power to tell.

(III. ii. 106-120)

これ以上に絶望的な表現があるであろうか。進軍するボリングブルクの軍隊は、リチャードの領土を掩いつくす洪水にたとえられている。それよりも絶望的な印象をさらに強めるのは、国内の軍人はいうまでもなく、本来戦争を恐れきつう者達までが、王に対して敵意を持っていることである。「白ひげの老人」(White-beards)や「女の声をした少年達」(Boys with women's voices)や「糸をつむぐ女ども」(distaff-women)までがリチャードと戦おうとする。そして王のために祈禱しなければならぬ救民院の者達 (Beardsmen) である。だがさらに念を押すようにスクールプは、とする。事実、リチャードは、全国民を敵にまわしているのである。だがさらに念を押すようにスクールプは、「老いも若きも叛逆し、言葉でいえない程の最悪の事態である」という表現で最後を締めくくり、リチャードの

おかれた立場が絶望的であることをも一度強調している。

王は寵臣達がやすやすとボリングブルクの侵入をゆるしたことを怒り、彼等が敵に降服したと疑う。だが彼等がすでに殺されているときいて、'De Casibus'の主題^⑧である「墓」や「蛆虫」や、王冠の中に住みついて王の威光と栄華を嘲る「死」の道化師について述べ、王はただの人間だから、儀式ばった敬礼などして馬鹿にしてくれるなどという。絶望的な事実が、彼の信する王の尊厳と神聖さを愚弄するのを感じて、彼はその信仰を否定しようとするのである。これに対して Carisle はこう。

My lord, wise men ne'er sit and wail their woes,

But presently prevent the ways to wail.

(III. ii. 178 f.)

オーマールも父ヨークが軍隊をもっていることを思い出さして 'learn to make a limb' という。それに元気づいて敵と一戦を交える勇気を取り戻したリチャードが、スクループにヨークの軍隊がいる場所を尋ねると、そのヨークも敵と合体していることがわかって、一縷の望みも絶たれるのである。

Your uncle York is join'd with Bolingbroke,

And all your northern castles yielded up,

And all your southern gentlemen in arms

Upon his party.

(III. ii. 200-203)

我々は、ヨークの軍隊で敵に勝つことは、「浜の真砂を数え、大洋の水を飲みほす」(二幕二場百四五行)ように不可能であることを聞いていたが、ヨークがボリングブルクと合体した事実も知っていた。そういえば、ウェールズ人の解散も、リチャードの寵臣達の処刑も知っていたし、国民全体の背反についても、これまでそれを暗示する多くの言及があった。だからリチャードがウェールズに上陸する三幕二場以後における劇の興味は、王にとって悪いニュースそれ自体を知ることにあるのではなくて、そのニュースの一つ一つに対して、王の神聖を信ずるリチャードがどのように反応するかにあるのである。リチャードの「詩人的」性格が王国を失った理由と考える批評家達は、引用したカーライルの王に対する忠告(My lord, wise men never sit...)をいつも引合にだす。たとえばグプタは次のようにいうのである。

Although he [Richard] has received some rude shocks — the departure of the Welsh army, the beheading of the favourites by Bolingbroke who has repealed himself — his cause is not irretrievably lost, and both Carlisle (III. ii) and Aumerle in Flint Castle (III. iii) think that he may yet consolidate his forces.^②

だが我々は、カーライルもオーマールも、観客ほど、リチャードのおかれている情勢について知っていないことに注目しなければならない。カーライルは、絶望的なスクループの言葉をきいて、沈黙してしまうのではないか。王が側近の者達に

High be our thoughts: I know my uncle York

Hath power enough to serve our turn.

というとき、我々は、哀れみとともにアイロニーを感じるのである。コーラスともいえるソールズベリーやスクループの絶望的な強い表現の効果よりも、我々ほど情勢を知らないカーライルやオーマールの言葉を重視して、リチャードにまだ回復の余地があると考えるところに問題があるのである。アイルランドから帰ったリチャードが受け取る悪い知らせは、グプタがいうように、ウェールズ人の解散と王の寵臣達の処刑だけであろうか。我々は、スクループが伝える全国民のリチャードに対する敵意と、ヨークとボリングブルクの合体のことを忘れてはならない。

シェイクスピアが、リチャードのおかれた立場を全く絶望的なものとして描いていることはあきらかである。この認識は、劇の後半におけるリチャードの行動を愚かなものにしないうために、『リチャード二世』の解釈上きわめて重要である。第二幕までに完全に権力を奪われることによって、はじめてリチャードは、自由に自己の感情にひたることができるのである。彼の言葉が詩的であるのは、絶望的な王を中心にもつ詩劇の主人公として生きるために、いろいろな場面における彼の心の中を詩でもって表現しなければならないのであって、彼が詩人であるから、あるいは戦いよりも言葉を愛したから王国を失うのではない。マクベスの用いる詩的なイメージャリーが、彼の強い想像力を示すとか、彼は実際には詩人であった証拠であると主張したら、Kenneth Muir も言うように、^⑩我々は現実の生活と劇とを混同していることになる。詩劇の人物は、誰も詩を話すことができるが、この詩は、必ずしもその人物の詩的傾向を反映しない。それは、作者の一つの medium にすぎないのである。リチャードについても、それと同じことがいえるであろう。彼の用いるイメージャリーは、彼の心をいきいきと表わすが、その詩は、彼の口をとらうして語られるシェイクスピアの詩なのである。^⑪

リチャードの苦悩は、神権説に対する彼の信仰と、実権を奪われては、不正なボリングブルクに抗することができないという現実との矛盾から生ずるのである。三幕三場で、ボリングブルクは、ノーサンブランドをフリント城につかわし、追放の宣言を取消して、没収された彼の所領を無条件で戻してくれるように要求する。リチャードは、跪いて王に対する礼を示さないノーサンブランドに、もし自分が彼の王でなければ、「余を神の代理たる職からとかれた神の署名をみせてくれ」という。

show us the hand of God

That hath dismiss'd us from stewardship;

For well we know, no hand of blood and bone

Can gripe the sacred handle of our sceptre,

Unless he do profane, steal, or usurp.

(II. iii: 77-81)

ここには、正統な王は、神によって選ばれた地上の代理者であり、神を冒瀆しない以上は、人間の力によってその地位を奪うことはできないという神権説に対する信仰があるが、ボリングブルクの大軍を前にして、彼の要求を拒むことができないで、「その当然の要求をことごとく許す」ことを「できるだけ耳に快い言葉」で伝えてくれるようにノーサンブランドに頼む。しかし機嫌をとるようにして、「反逆者の要求をみとめる恥辱に甘んずるよりは、挑戦して死んだ方がよいと思う。

K. Rich. [To Aumerle.] We do debase ourselves, cousin, do we not,

To look so poorly, and to speak so fair?

Shall we call back Northumberland, and send

Defiance to the traitor, and so die?

Aum. No, good my lord; let's fight with gentle words

Till time lend friends and friends their helpful swords.

(III. iii. 127-132)

このオーマールの言葉も、グプタや他の批評家達によつて、リチャードにまだ回復の余地がある証拠として注目されてきた。だがここでオーマールは、挑戦して死のうとするリチャードを宥めているにすぎないのである。これはむしろシェイクスピア自身にとって必要な言葉であつただろう。彼がこの劇で描こうとするものは、王の突然の死ではなく、神聖な王の没落してゆく苦悩だからである。

リチャードには、「あの高慢な男にきびしい追放の宣告をいい渡した舌が、お世辞をいってその宣告を取消さなければならぬ」のが堪えられないのである。彼はつづづけていう。

O that I were as great

As is my grief, or lesser than my name!

Or that I could forget what I have been,

Or not remember what I must be now!

Swell'st thou, proud heart? I'll give thee scope to beat,

シェイクスピアの『リチャード二世』再考

Since foes have scope to beat both thee and me.

(III. iii. 136-141)

王の尊厳に対する信仰と、自分がいまおかれている現実との矛盾がうみだす深い悲しみは、その悲哀にひたろうとする欲求にうつらなつてゆく。ホリングブルタのところから戻ってきたノーサンバランドの言葉をきく前に、リチャードは「みずから絶望の境を口にするのでせむ。

What must the king do now? must he submit?

The king shall do it: must he be deposed?

The king shall be contented: must he lose

The name of king? o' God's name, let it go:

I'll give my jewels for a set of beads,

My gorgeous palace for a hermitage,

My gay apparel for an almsman's gown,

My figur'd goblets for a dish of wood,

My sceptre for a palmer's walking-staff,

My subjects for a pair of carved saints

And my large kingdom for a little grave;

A little little grave, an obscure grave,

Or I'll be buried in the king's highway,

Some way of common trade, where subjects' feet

May hourly trample on their sovereign's head;

For on my heart they tread now whilst I live;

And buried once, why not upon my head?

(III. iii. 143-159)

ここでは自分が退位して、王の権威を表象するものを一つ一つ卑しいものにとりかえ、墓に埋められた後のことまでが想像の中でたどられている。「この大きな王国を小さな墓に、小さな小さな墓に、名も知られぬ墓にかえよう」という言葉が示すように、自分が失うものが偉大なものであり、それと取替えるものが、できるだけ卑小であることが望ましいのである。自己に対する哀れみにふけるリチャードのそのような性格は、スクループの悪い知らせをきいた彼が、「無駄な慰め」で、せっかく「絶望への甘い道」(that sweet way I was in to despair) (III. ii. 205)を辿っていた自分を目覚ませたといつてオーマールを叱るあの場面にも窺えるところであろう。ある批評家達によれば、リチャードの没落の責任は、彼のそのような弱い性格にあるのであって、たとえばグブタは、彼を「悲しみに耽るために王国を譲り渡す夢想家」(a dreamer who gives away a kingdom in order to luxuriate in his griefs)と呼ぶのである。三幕三場の終りにおいてポリングブルクは、自己の権利のみを要求して決してそれ以上を望まないことを、尊敬を失わない態度で王に強調している。これに対して自己の哀れみを追究するリチャードは、ポリングブルクの言えない言葉を自ら言つてやるのである。

K. Rich. Fair cousin, you debase your princely knee

To make the base earth proud with kissing it ;

Me rather had my heart might feel your love

Than my unpleased eye see your courtesy.

Up, cousin, up ; your heart is up, I know,

Thus high at least, although your knee be low.

Boling. My gracious lord, I come but for mine own.

K.Rich. Your own is yours, and I am yours, and all.

Boling. So far be mine, my most redoubted lord,

As my true service shall deserve your love.

K.Rich. Well you deserve : they well deserve to have,

That know the strongest and surest way to get

What you will have, I'll give, and willing too ;

For do we must what force will have us do.

Set on towards London, cousin, is it so ?

Boling. Yea, my good lord.

K.Rich. Then I must not say no.

(III. iii. 190-210)

ここに於けるボリングブルクの態度を考慮すれば、事実、王のおかれた立場は、彼にその意志さえあれば、窮境

を脱することができるような印象を与える。Robert Orsteinも、この場面のリチャードについて、「もし彼が揺ぎない自信をもって、彼の権威を保っていたならば、ボリングブルクは忠誠を言明しているため、うごきとれないで、彼の公爵領で満足していただろう」というのである。しかしシェイクスピアは、ここでそういう問題を扱っているのであろうか。それはリチャードの存在理由と関係のない問題のように思われる。これまでに見た王位の尊厳に対する彼の崇高な感情が示すように、リチャードは屈辱的な状態で王であることには堪えられない中世最後の正統の王であり、寵臣が殺され、叛逆者に支配されるこのような情況のもとで、たとえ王位が維持できても、*'subjected thus, / How can you say to me, I am a king?'* というであろう。シェイクスピアは、この場面の行動しない王に、我々が愚かさやアイロニーを感じるように意図しているのではない。これは、すでにみてきたソールズベリーやスクループのコーラス的な表現が示すように、リチャードの立場が全く絶望的なものとして描かれているのであり得ないことである。このすぐ前の場面におけるリチャードの悲歎と空想にふける態度をみて、ノーサンバランドは、*'Sorrow and grief of heart / Makes him [Richard] speak fondly like a frantic man'* とボリングブルクに報告する。事実、自己の悲哀をたのしむようなリチャードの態度は、絶望の苦しみからうみだされたもので、グプタが考えるように、審美的なものではない。悲しみに耽らんがために王国を譲りわたすのではないのである。

それにしても、ボリングブルクをどのように解釈したらよいのであろうか。追放を許され、公爵領を相続する権利を認めてもらう以外に何も野心をもたないことを、ヨークやリチャードにくりかえし強調し、もしその要求が認められれば王に忠誠をつくすことを誓いながら、一方では、リチャードの寵臣達を処刑し、自分の要求が入れられなければ、国土を荒廃させると脅迫するのである。この人物の態度には、たしかに曖昧なところがある。彼

の王位の獲得は、慎重に計画された運動の結果なのであろうか。だが劇の人物が陰謀をかくしている場合、シェイクスピアは、独白によって観客にそれを知らせるのが普通である。そうでないのに、人物が明白にのべた言葉を無視して、彼の心の裏をかんぐる批評態度は、シェイクスピアの場合、非常に危険である。私には、彼のいうことに偽りがあるとは思われない。これはポリングブルクが、劇全体にわたってよい性格として描かれていることからも推察がつくのである。彼の態度が曖昧なのは R. H. Hill がいうように、^⑤ 篡奪者の政治的な曖昧さをあらわしているのとみるよりも、J. D. Wilson のように、「彼の意志を越えた力によって高いところに運ばれた」と^⑥ 考える方が正しいであろう。ポリングブルクが自分の公爵領を継承する権利を要求したことが、王を退位させる結果になったように思われる。

リチャードの没落には、神の意志あるいは運命の力が働いている。風や海の潮さえも、アイルランドからのリチャードの帰国を遅らせ、天空における不吉な前兆が、王が望みをかけていたウェールズ人達を驚かして去らせるのである。私が 'One day too late' あるいは 'O, call back yesterday...' をこの劇で重視する理由である。リチャードが隠れているフリント城の前に、ポリングブルクが大軍を率いてやってくる重大な場面で、彼とヨークは次のような対話をかわしている。

York. Take not, good cousin, further than you should,

Lest you mistake: the heavens are o'er our heads.

Boling. I know it, uncle, and oppose not myself

Against their will.

(II. iii. 16-19)

まだヨークもボリングブルクも、神の意志が、いま彼等が考えている方向とは逆に働いていることに気がついていないが、*'oppose not myself/Against their will'* は、ボリングブルクが神の意志によって動かされていることを暗示する言葉である。劇の初めで Gaunt は、殺された夫の復讐を求めるグロスターの未亡人に *'Put we our quarrel to the will of heaven'* (I. ii. 6) とのべ、ヨークは終幕で、リチャードがロンドンに連れてゆかれる哀れな場面を思ひ出して、*'heaven hath had a hand in these events'* (V. ii. 37) という。事実、リチャードの没落には神の意志が働いており、心の動きが示されないボリングブルクの不思議な態度には、なにか受動的な運命の手先をおもわせるものがある。

運命の神を象徴するものは、ふつう車輪 (Wheel) であるが、この劇では車輪についての言及はみられないで、我々にあまりなじみ深くない釣瓶が、その象徴として用いられている。王冠を譲り渡す前に、リチャードは、それをはさんでボリングブルクと向いあつて立ちながら次のようにいう。

Here, cousin, seize the crown;

Here, cousin;

On this side my hand, and on that side yours.

Now is this golden crown like a deep well

That owes two buckets, filling one another,

The emptier ever dancing in the air,

The other down, unseen, and full of water :

That bucket down and full of tears am I,

Drinking my griefs, whilst you mount up on high.

(IV. i. 181-189)

リチャードは、ボリングブルクに王冠の他の側を手で支えてくれるように頼むことよって、まえて意識的に象徴的な場面をつくりだしている。この演技を好むような王の態度は、彼のいわゆる「詩人的」性格とともに、彼の特性をあらわすものとして注目されてきた。しかし彼は詩人でないように、また役者でもない。没落する王の役を演ずるような彼のいわゆる「役者的」態度も、リチャードが舞台の中心を占めて、感銘的な効果をうみだすようにするためのシェイクスピアの *medium* なのである。オセロの最期を描く場面を思い出してみればわかるであろう。自己劇化 (*self-dramatization*) は、悲劇の芸術における一つの手法なのである。しかしある批評家達にとっては、リチャードに対する軽蔑から、この退位の場面の効果は訴えないようである。たとえば、ボリングブルクとの対照においてリチャードを軽蔑する James Winny は、ここで王が用いる釣瓶の比喻について次のようにいう。

The empty bucket, 'dancing in the air,' could only represent the shallow frivolity of Richard, who even at this moment of disaster hunts after literary conceits, as the weight and fullness of the other symbolize Bolingbroke's political mastery. ^⑤

だが我々は、この比喻の用い方に、なおもリチャードの軽薄な性格をよみとらなければならぬのであろうか。 Derek Traversi もウィニーと同じ見方をしているが、それはリチャードをとうして語られるシェイクスピアの

主題なのである。井戸の釣瓶のイメージは、この劇全体の意味を要約しているといえる。『リチャード二世』は、新王の運命が向上する同じ割合で、去りゆく王が没落しなければならぬ王権の悲劇だからである。この劇で上と下が何を意味するか、指摘するまでもないであろう。二幕四場でソールズベリーは、ウェールズ人の隊長が去ってゆくのをみて「Thy [Richard's] sun sets weeping in the lowly west (II. iv. 31)」といった。この「lowly」は、もちろん低いという意味と卑しいという意味を同時に含んでいて、釣瓶の比喻と同じように、「weeping」という涙の主題と結びついている。三幕三場でリチャードは、叛逆者の要求に応じてフリント城の前庭 (base court) に降りてゆく自分を、天から落ちてゆく「輝くフェートン」(glistering Phaeton) にたとえ、その前庭におつて、「base earth」の上でひざまづくボリングブルクに、王は「Up, cousin, up; your heart is up, I know, / Thus high at least, although your knees be low' (III. iii. 195f.)」と叫んだ。王にとってだけでなく、この劇全体において、上にあがること、高いことは、偉大さ、繁栄、歓喜を意味し、下ること、低いことは、卑しさ、衰微、悲哀をあらわすのである。そしてそのようなこの劇の中心主題が、'dancing' と 'tears' という対照的なイメージを伴って、王冠を譲り渡すこの場面で、井戸の釣瓶の比喻の中に集約されているのである。その言葉は、アクションを伴うだけに、クライマックスの場面にふさわしい大きな劇的效果をもつのである。なおも魔術を信じたエリザベス朝の人々にとっては、黄金の王冠は、大きな象徴的な価値があったに違いない。その神聖なシンボルが新しい王に渡される敵軍な行為の意味を、彼等は我々よりも理解できたのである。

ウィニーは、王の特質に欠けるリチャードを王権の 'shadow'、りっぱな王の資質をそなえたボリングブルクを 'substance' として、二人の対照の中にこの劇の意味をとらえようとする。⁹ この両者の政治的能力の対照が、この劇の構成に貢献していることは、多くの批評家達の指摘するとうりである。だがより深い動機や心の状態が示さ

れる内的な領域においては、これと同じような対照がみいだされないのである。退位の場面において、王冠を脱ぐときのリチャードの心の動きは詳細に伝えられているが、ポリングブルクは「silent king」と呼びかけられ、傍観的態度に終止して、その言葉は短かく、そつげなく、王位を譲りうける彼の心境は知るべきもないのである。彼のそのような態度に関して、これまでいろいろな説明がなされてきた。王権の實質を得れば、その正当性は問題でないとする新しい人間を示すともみられ、この劇における運命の意義を示す手法ともとられ、またシェイクスピアがこの人物の動機をあまり深くさぐるうとしないためだと考えられた。しかしその理由はともあれ、結果としては、リチャードにすべての光があてられ、ポリングブルクの影が薄くなるのである。事実、このクライマックスの場面におけるシェイクスピアの大きな目的は、リチャードのペーソスに観客の注意を集中させることにあるのであって、ポリングブルクの心の中を描くことを差控えたのも、そのためであるように思われる。リチャードの没落が失政を行った彼の責任であることは、この劇に含まれた最も確実な教訓の一つであろう。だが、王位を奪われてゆくリチャードのペーソスそれ自体は、政治的な問題をはなれた永遠の主題であり、王の神聖さの強調や、篡奪の罪がもたらす血なまぐさい英国の未来に対する種々の予言によって、彼の悲劇はさらにその重みを加えられている。我々はこの劇の政治的要素に注目するあまり、その悲劇的要素を軽視してはならないのである。

グプタが、リチャードの性格における断層を「謎」と呼び、劇の「最大の欠陥」といつていることはすでに述べた。だがその性格の矛盾は、劇の欠陥といえるかも知れないが、「謎」であるとは思われない。このような性格の矛盾は、『ジョン王』の庶子にもみられる。その劇の前半における諷刺的で喜劇の vice に似た彼の性格の中には、後半における愛国主義者を暗示する要素は微塵もないのである。だが主題の面からみると、前半における便宜主義の主題と後半における愛国主義の主題とが、半ばコーラス的な彼の性格の中に矛盾するように反映

しているのが分るのである。^⑤ リチャードの場合も、主題の要求に応じて、性格の一貫性が犠牲にされているように思われる。王が没落する理由がのべられている劇の前半においては、彼は不遜で軽薄な浪費者として描かれ、専制的でむしろ活動的な性格であった。だが運命の力で王権が奪われ、没落してゆく彼の苦悩や悲哀が描かれる劇の後半においては、その経験や感動を伝えるために、リチャードは内省的となり、口数がふえ、言葉が詩的にならなければならないのである。劇の後半で彼が多弁になることと、王国を失ったこととは直接関係はない。我が劇の人物の思想や感情を詳しく知るためには、彼がそれについて詳しく述べる以外に方法はないのである。リチャードの「詩人的」性格を軽蔑する批評家達にとっては、劇の後半は退屈なものであろうが、シェイクスピアは同情をもって王の没落を描いている。リチャードが、過去の王達の運命を辿りながら、「死」の「道化師」に愚弄される栄華の運命をおもうとき（三幕二場）、ボリングブルクとともに王冠を支えながら、二人の間の運命の浮沈を井戸の釣瓶にたとえるとき（四幕一場）、またもってこらせた鏡に自己の栄光の脆さを見るととき（四幕一場）、この人物の空想的で芝居じみた性格が強調されているというよりは、彼をとうして詩人が語っているのである。

注

- ① A. P. Rossiter, *Angel with Horns* (Longmans, 1962), p. 210 ff.
- ② S. C. Sen Gupta, *Shakespeare's Historical Plays* (Oxford, 1964), pp. 120 f.
- ③ R. D. Altick, "Symphonic Imagery in *Richard III*", *PMLA*, LXII (June 1947), p. 364.
- ④ A. P. Rossiter (ed.), *Woodstock* (Chatto & Windus, 1946).
- ⑤ Nicholas Brooke (ed.), *Richard II* (Casebook Series), p. 29.
- ⑥ ホリンシェットの『年代記録』では、ボリングブルクとてのみ Ravenspur に上陸した者は 'not past three-score persons'.

- (ii. 853) とはいつころか、シハトスクリムに劇づけは、彼は多くの貴族とよびて、リタミー公爵の後援で 'eight tall ships' と three thousand men of war' (II. i. 286) を降つてきていつかの時で敗れたと云ふ。これに對してリチャードは、
 ヤン・ド・カウ 'some few private friends' (III. iii. 4) と云つておたじろびたといふ。
- ⑦ Irving Ribner, *The English History Play in the Age of Shakespeare* (Princeton, 1957), p. 165.
- ⑧ J. の編んだもの 'De Casibus' の并置といふは、William Farnham, *The Medieval Heritage of Elizabethan Tragedy* (Oxford, 1963), pp. 415—420, を参照せよ。
- ⑨ Gupta, *op. cit.*, p. 120.
- ⑩ Kenneth Muir (ed.), *Macbeth* (The Arden Shakespeare), Introduction, p. 1 ix.
- ⑪ See Peter Ure (ed.), *King Richard II* (The Arden Shakespeare), Introduction, p. 1 xix.
- ⑫ Gupta, *op. cit.*, p. 120.
- ⑬ Robert Ornstein, *A Kingdom for a Stage* (Harvard, 1972), p. 116.
- ⑭ III. ii. 176f.
- ⑮ John Russel Brown & Bernard Harris (ed.), *Early Shakespeare* (Stratford-Upon-Avon Studies 3, 1967), p. 107.
- ⑯ J. D. Wilson (ed.), *Richard II* (The New Shakespeare), Introduction, p. xx.
- ⑰ ホリングブルクが最初から王位を簞奪する野心をもつていなかったらといつては、『ヘンリー四世・第一部』における叛軍の使節ウスターの言葉 (V, i. 30—71) がそれを裏付けている。また『第二部』でも、死期の近づいたヘンリー四世は、王位を得るに至つたとき再び振返つて、次のように説明する。

Though then, God knows, I had no such intent,

But that necessity so loved the state

That I and greatness were compelled to kiss:

(*2 Henry IV*, II. ii. 42-44)

この悔恨の深い調子は、言葉が真実であることを示している。事実、諸家が指摘するように、『リチャード二世』におけるこの人物の解釈は、Samuel Daniel の立場を反映しているようである。ホリングブルクの罪を運命のせいにするダニ

キハクヲ興念びて臣の才の乏しき。

Thou didst conspire with Pride, and with the Time,
To make so easie an ascent to wrong,
That he who had no thought so hie to clime
(With favouring comfort still allur'd along)
Was with occasion thrust into the crime;
Seeing others weakenes and his part so strong.
“And who is there, in such a case that will
“Do good, and feare, that may live free with ill?”

(*The Civil Wars*, Book I, 94)

ホキストは Laurence Michel (ed.), *The Civil Wars* (Yale U. P., 1958) を使用した。

- ⑲ James Winny, *The Player King* (Chatto & Windus, 1968), p. 62.
⑳ Derek Traversi, *Shakespeare—from Richard II to Henry V* (Stanford, 1957), p. 40.
㉑ Winny, *op. cit.*, p. 61.
㉒ なるべの問題をめぐって、『英文学評論』(京都大学教養部英語教室)の第二十六集における拙論を参照されたい。